

精神遅滞児の要求行動の生起におよぼす 要求充足者の親密度の影響

藤原 義博*

(平成2年10月31日受理)

要 旨

言語発達レベルの異なる4名の精神遅滞児を対象に、要求充足者の要求者に対する親密度の差が、要求行動の生起と反応型に及ぼす影響について検討した。実験は、要求充足者として、被験児にとって最も親密度が高い「母親」を用いた条件と、最も親密度が低い「未知の人」を用いた条件を設定した。自己充足困難事態(A)と自己充足容易事態(B)において、「母親」条件と「未知の人」条件で、それぞれ要求行動の生起頻度と反応型について観察を行った。また、母親と未知の人が要求充足者として同室する自己充足困難事態(C)においても同様の観察を行った。結果は、自己充足困難事態において、母親条件で未知の人条件を上回る要求行動の生起が認められた。また、要求充足者の親密度の差によって、発現する要求行動の反応型に差が認められた。しかし、結果の分析から、要求行動の生起とその反応型の選択においては、要求者に対する要求充足者の親密度という要因以上に、要求文脈において獲得される要求充足者の刺激機能が重要な要因となることが示唆された。

KEY WORDS

mand

要求行動

mental retarded children 精神遅滞児

reinforcement mediator 強化メディエーター

問 題

近年、ことばに重篤な遅れをもつ自閉症児や精神遅滞児の言語形成においては、日常場面で自発的で機能的な言語の使用を確立することが重要な目標となっている。これらの研究では、標的となる機能的な言語行動として要求行動の形成を試みているものが多い(e. g., Hart & Risley, 1975; Halle et al., 1979; 加藤, 1988; 阿部, 1989)。そして、そのほとんどが機会利用型指導法(Hart & Risley, 1975; 阿部, 1989)や時間遅延法(Halle et al., 1979; 加藤, 1988)など、言語技能の形成技法やその手続きの有効性について検討したものである。しかしながら、これらの基礎となる要求行動の生起と成立過程にかかわる要因について分析したものは少ない。

要求行動の生起に関わる環境的要因についての分析では、藤原ら(藤原, 1985; 藤原・加藤,

* 障害児教育講座

1985) が、言語レベルの異なる自閉症児や精神遅滞児を対象に一連の実験観察を行っている。その結果、要求対象物を自己充足できないかあるいは自己充足が困難な「自己充足困難事態」を設定するという物理的環境操作によって要求行動の生起を高めることが出来ることを見いだしている。また、発現される要求行動の反応型は、その場の物理的環境条件と対象児のその時点での言語発達レベルによって選択されることが示唆されている(藤原・加藤, 1985)。

要求行動の生起に関わる重要な要因として、物理的な環境条件の他に要求充足者たる人の存在が考えられる。すなわち、要求行動は、自己の欲求を他者に伝えるという伝達行動である。従って、“pure mand”¹⁾のような特別な場合は別として、通常は伝達対象となる人の存在が要求行動の生起に重要な機能を果たすと考えられる。行動分析学では、この要求行動の生起における人(聞き手)の機能を、伝達対象としての弁別刺激であると同時に強化メディエーターとして分析している(Skinner, 1957; Winokur, 1976)。藤原(1985)は、要求行動に乏しい自閉症児を対象とした実験観察から、この要求行動の生起に関する要求充足者の機能獲得について、子どもの欲求に対して即座に充足するという受容的対応体験を通して、要求充足者が強化メディエーターとしての機能を獲得すると同時に、要求行動の生起を統制する弁別刺激機能を獲得することを見出している。

一方、言語遅滞児の言語獲得において関係論の立場に立つ研究者は、要求行動も含めたコミュニケーション行動が成立するための前提条件として、人間関係の重要性を強調している。つまり、言語を代表とするコミュニケーション行動は基本的には話し手と聞き手との人間関係が成立して初めて確立される行動であると思なしている。そこで、要求充足者の要求行動の生起に関する刺激機能が、藤原(1985)が示唆したような要求行動に固有な対応関係において獲得されると考える他に、広く要求者に対する要求充足者の親密度によって成立するといった可能性も考えられる。

そこで、本実験観察では、要求充足者が被験児にとって接触経験が長くよく知った「既知の人」か、あるいは全く会ったこともない「未知の人」という、要求充足者の親密度の差によって、要求行動の生起とその反応型がどのように影響されるのかについて検討した。即ち、自己充足困難事態において、被験児と最も親密度の高いと思われる母親(既知の人)と、最も親密度が低いと思われる見知らぬ人(未知の人)を導入し、両条件における要求行動の生起とその反応型の差について検討を試みた。

方 法

1) 被験児

以下のような言語発達レベルの異なる4名の精神遅滞児を用いた。

- (1) 生活年齢および検査結果：各被験児の生活年齢、診断名、および知能検査、発達検査の結果は、表1に示す通りであった。
- (2) 日常での要求行動および言語行動の特徴

S1：身の回りの簡単な指示理解も困難で、粗大な模倣行動も確実に出来なかった。要求は明確で、人の手を持って連れて行き、人の腕を対象物に押しやるハンドリングやクレーン行動が主な要求行動であった。しかし、時に手差しや指さしも見られた。ことばはないが、要求動作

表1 被験児のプロフィール

被験児	年齢	診断	田中ビネー (MA)	PVT	津守式乳幼児発達質問紙				
					運動	探索	社会	習慣	言語
S1	4:6	精遅	不 能	不 能	2:0	1:6	1:3	1:9	1:3
S2	3:3	自閉	0:4	<2:0	2:0	1:6	1:3	1:6	1:0
S3	5:8	精遅	1:9	2:8	4:6	3:0	4:0	4:6	2:6
S4	4:9	精遅	3:4	2:0	4:0	3:0	1:9	4:0	2:6

と共に強い促し的な要求発声を伴うことが多かった。

S2: 理解能力はかなり認められるが、学習は安定せず、不確実な反応を示すことが多かった。対人回避傾向があり、要求は見られるが日常では人を介するよりも自分で欲求を満たそうとする傾向が強かった。要求行動は、手指しや指さしがあるが、ハンドリングやクレーン行動も多くみられた。それと共に、要求発声や一語文による要求もみられた。

S3: 身近な物事の理解はかなり良好で、学習能力も高いレベルを示した。二語文程度の会話も可能で、発語頻度も高かった。しかし、発音は不明瞭で聞き取りにくかった。要求は明確で、指さしやことばによって要求した。

S4: 言語理解、学習能力ともかなり良好で、二語文程度の会話が可能であった。しかし、日常での発語頻度は少なく、会話の相互のやり取りが続かないことが多かった。要求は、ことばや指さしによってなされた。

2) 実験設定および実験条件

(1) 実験条件:

図1のような戸棚以外には何も置いていない観察室において、次の3つの事態で実験を行った。

①自己充足困難事態 (A1, A2): 戸棚の被験児の手の届かない高さの棚に、被験児が好む数種類の菓子、絵本、ブロックパズルを並べて置いた。

②自己充足容易事態 (B): A 事態と同様の設定で、棚から約 50 m 離れた位置に子どもの力で持ち運びが可能な椅子を置いた。即ち、椅子の上に乗れば棚の上の対象物に手が届き、自己充足が可能な事態であった。

③親密度の異なる二人の要求充足者の同室事態 (C): A 事態と同様の設定に加えて、棚から約 3 m 離れた正面の壁際に、入口のドアを挟んで両側の等距離 (約 2.5 m) の位置に、被験者の母親と未

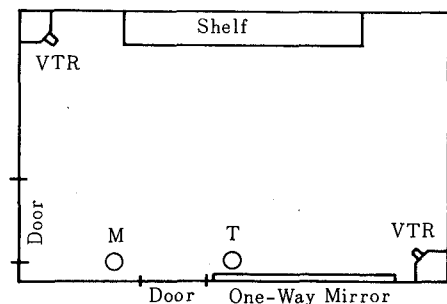


図1 実験事態

知の人を棚に向けて座らせた。

(2) 要求充足者：（以下、充足者とする）

A, B 両事態において、被験者に対して親密度の異なると思われる次の「人」をそれぞれ充足者として被験児と共に同室させた。

①被験児の「母親」：被験児にとって親密度の最も高いと思われる充足者。

②「未知の人」：被験者と全く面識のない、被験者にとって最も親密度が低いと思われる充足者。従って、充足者は各セッションごとに毎回異なった。

3) 手続き

(1) 実験スケジュール：

実験は、A1, B, A2, C 事態の順に行った。A1 と B 事態の実験は続いて行い、B 事態の終了後約 2 カ月において A2, C 事態で実験を行った。

各々の事態において、「母親」あるいは「未知の人」を（C 事態では同時に）被験児と共に同室させた実験セッションを、それぞれ 2 セッション行った（計 $3 \times 2 \times 2 + 2 = 14$ セッション）。各事態ごとに、各々の充足者の順序はランダムであった。また、C 事態では、母親と未知の人の座る左右の位置は、セッション毎に逆転された。

なお、実験セッションを行う前に、観察室への馴化手続きとして、要求対象物を手の届く高さに置いた自己充足可能事態で、被験児を母親と共に入室させる予備セッションを 2 回行った。

実験セッションは、月に 2 日程度の割合で、1 日に 1~2 セッション、約 40 分間の個別指導の開始前かあるいは個別指導を挟んで行った。

(2) 実験手続き：

被験児に対して、室外に出ること以外には何の行動上の制限も加えない状態で、10 分間実験を行なった。A・B 事態では、充足者は、被験児が実験室に入室する以前に、室内の戸棚の側で部屋中央を向いて立ち、待機した。その際、充足者は被験児からの働きかけには積極的に応じ

表 2 要求関連行動の行動項目

行動項目	内 容
A. 自己充足行動	自分で対象物を取る、また取ろうとする行動
B. ダッコ要求	棚の前で他者に抱き上げることを促す、あるいは抱かれて対象物を取ろうとする。
C. クレーン行動	他者の手あるいは腕を持って、対象物に向けて押し上げる
D. 手 差 し	棚上の対象物を手で指し示す
E. 指 さ し	棚上の対象物を指で指し示す
F. 要 求 発 声	他者に向けた意味内容が不明な発声による要求行動
G. 要 求 発 話	他者に向けた意味内容が明らかなことばによる要求行動

るが、それ以外の充足者からの被験児への働き掛けは行わないように事前に指示されていた。C事態では、二人の充足者が棚正面の壁際の椅子に座っていた。その他の手続きはA事態と同様で、要求充足後（対象物を与えた後）は、即座に椅子に戻るよう事前に指示されていた。

4) 要求対象物

母親からの聴取と予備観察の結果を基に、被験児が好むと思われる菓子類や飲物、そして最も使用頻度の高かった絵本やパズルなど、約10品目を選択した。要求対象物は戸棚の被験児から見える位置に並べて置いた。

要求対象物は、対象児からの要求に対して、菓子類以外の物では1品を与え、菓子類や飲物においては中味を1個あるいは1口程度の分量に分けて与えた。

5) 記録および結果の整理

室内に設置された2台のビデオカメラとマイクによって録音録画したビデオテープを基に、表2に示した要求行動に関連すると考えられる行動項目（要求関連行動項目）に基づいて結果を整理・分類した。なお、分析の対象とした反応は、棚においた要求対象物への関連が明白で、反応型が明確なもののみとした。

また、各行動項目ごとに、行動の変化点から次の変化点までを1単位として記録し、各条件毎に2セッションの合計生起頻度を求めた。さらに、要求行動の生起から要求対象物の提示終了までを1単位として、各条件毎に2セッションの要求回数の合計を求めた。

結 果

図2は、各実験条件における2セッションの対象物に対する要求回数の合計を示したものである。図3は、自己充足困難事態（A1・A2）で観察された行動項目ごとの合計生起頻度に対する割合（生起率：%）を図示したものである。

1) 各実験条件における要求回数

一人の充足者を置く自己充足困難事態であるA1事態では、S2を除く被験児において母親を充足者とした条件（母親条件）で未知の人を充足者とした条件（未知の人条件）を上回る要求回数が観察された。また、同じ事態であるA2事態では、全ての被験児で、母親条件が未知の人条件を上回る要求回数を示した。その差は、S3とS4で顕著であった。

棚の近くに椅子を置いた自己充足容易事態であるB事態では、S3を除く被験児で、母親条件が未知の人条件を上回る要求回数を示したが、全ての被験児とも両条件間の顕著な差は認められなかった。また、S1を除いて両条件とも、A事態に比べて低い要求回数を示した。

母親と未知の人が充足者として同室するC事態では、S1を除く被験児において、未知の人条件で要求行動が生起せず、母親に対してのみ要求行動がみられた。また、S1においても、母親に対して未知の人の4倍にあたる要求行動が生起した。

2) 自己充足困難事態における要求行動の反応型

図3は、各被験児の自己充足困難事態（A1, A2）で観察された要求関連行動の行動項目別生起率を示したものである。それぞれの行動項目の生起率は、7種の要求関連行動項目の生起頻度を基に、その総合計頻度に対する比率を求めたものである。

結果は、各被験児とも充足者の差やA1, A2事態によって異なる結果を示した。また、被験

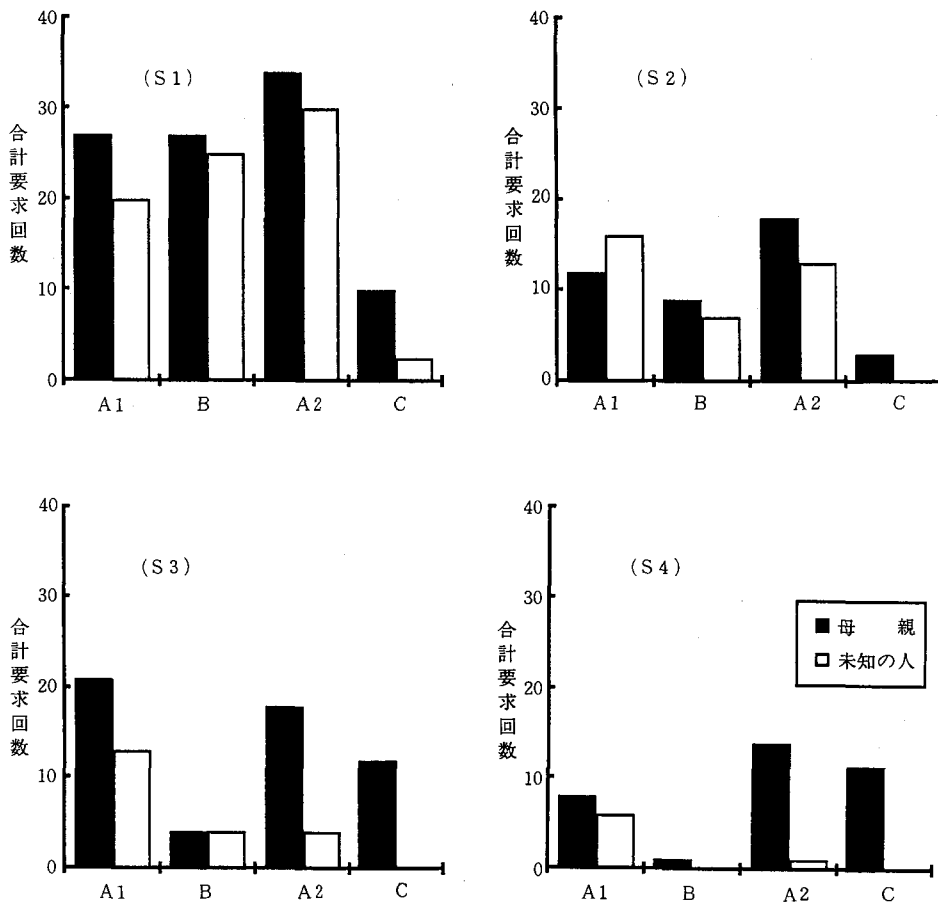


図2 各実験事態における合計要求回数

児毎の要求行動のプロフィールにも違いがみられた。

① S1 の要求行動の反応型

最初に行われた A1 事態では、母親条件、未知の人条件とも要求行動の反応型のレパトリーに差は認められなかった。しかし、要求関連行動の全体のプロフィールで見ると、未知の人条件に比べて母親条件ではクレーン行動で高い生起率を示した。

2 度目の自己充足困難事態である A2 事態では、母親条件、未知の人条件とも自己充足行動が消失および激減したが、要求行動の反応型のレパトリーに顕著な差は認められなかった。しかし、両条件とも A1 事態とは異なる結果を示した。すなわち、母親条件では「指さし」の生起率の増加に対して「クレーン行動」の減少が見られた。一方、未知の人条件では、逆に「クレーン行動」の生起率の増加に対して「指さし」の減少が認められた。

② S2 の要求行動の反応型

最初に行われた A1 事態では、母親条件、未知の人条件とも要求行動の反応型のレパトリーに差は見られなかったが、要求関連行動の全体のプロフィールでは顕著な差が認められた。すなわち、母親条件では「要求発語」と「クレーン行動」が要求行動の主要な反応型であったのに対して、未知の人条件では「要求発語」「クレーン行動」に加えて「要求発声」が

高い生起率を示した。

一方、A2事態では、A1事態と異なる要求関連行動のプロフィールを示した。すなわち、母親条件で「自己充足」行動が生起し、未知の人条件では「指さし」が見られるという違いが認められたものの、これらの生起率はいずれも低く、両条件とも「要求発語」が要求行動の主要な反応型であった。

③ S3の要求行動の反応型

A1事態では、未知の人条件で1回の「自己充足」行動が見られたものの、母親条件、未知の人条件とも「要求発語」「要求発声」「指さし」という要求行動の反応型が観察された。しかし、要求行動全体のプロフィールでは顕著な差が認められた。すなわち、母親事態では「要求発語」の生起率が最も高かったのに対して、未知の人条件では「要求発語」が最も低く「指さし」が最も高い生起率を示した。

A2事態では、母親条件でA1の傾向がより強調され「要求発語」と「指さし」がほぼ同率の高い生起率を示したのに対して、未知の人条件ではA1条件や母親条件と全く異なり、「指さし」以外の反応型は観察されなかった。

④ S4の要求行動の反応型

A1事態では、母親条件で「自己充足」行動が4回見られたが、要求行動の反応型のレパトリーは同じであった。しかし、そのプロフィールは異なった。母親条件では「要求発語」と「指さし」が高い生起率を示したのに対して、未知の人条件では「要求発語」の生起率は低く、「指さし」が75%と主要な要求行動の反応

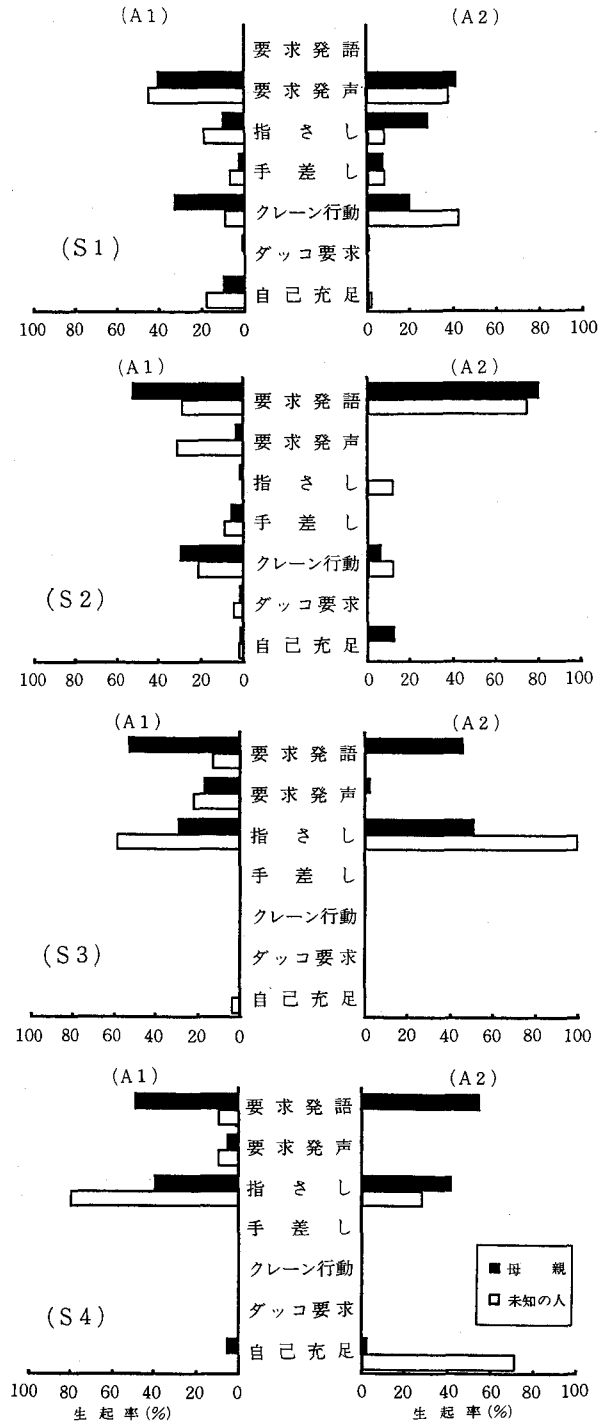


図3 自己充足困難事態における要求関連行動の生起率

型であった。

A2 事態では、母親条件で A1 条件の傾向がより強く表われ、「要求発語」と「指さし」が見られ「要求発声」は消失した。それに対して、未知の人条件では要求行動として観察されたのは「指さし」だけで、しかも A1 事態で見られなかった「自己充足」行動が 5 回生じた。

考 察

1) 要求充足者の親密度の差による要求行動の生起

本実験では、自己充足困難度の異なる事態を設定し、それぞれの事態において被験児にとって最も親密度の高いと考えられる母親を要求充足者とする場合（母親条件）と、最も親密度の低い未知の人を要求充足者とする場合（未知の人条件）で、要求行動の生起に差がみられるかどうかについて検討した。

結果は、自己充足困難事態（A1, A2, C）では、1 人の被験児の 1 事態を除いて、他の全ての被験児と条件で、要求充足者が母親である条件で未知の人条件を上回る要求行動の生起傾向が認められた。さらに詳細には、その差は被験児 S3, S4 の A2 事態で顕著に見られ、また母親と未知の人を同室させた C 事態では、全ての被験者ではっきりと区別して母親に対する要求行動が生じた。

以上の結果は、自己充足困難事態では、要求充足者の要求者に対する親密度の差が要求行動の生起に影響を及ぼし、要求充足者の親密度が高い場合に要求行動の生起傾向が高まることを示すものといえるであろう。特に、C 事態では、母親と未知の人が同室したために要求充足者の要求行動の生起に対する統制度の差がはっきりと表われたものと思われる。

しかしながら、同じ事態であったにもかかわらず、被験児 S1 で最初の A1 事態と後の A2 事態において母親条件と未知の人条件で要求行動の生起傾向に逆転が見られ、さらに S3, S4 で A2 事態においてその傾向に顕著な差の拡大が見られている。このことは、要求者に対する要求充足者の親密度のほか、要求行動の生起に関わる他の要因が関与したことを示唆するものと考えられる。1 つは、A2 事態での観察が 2 ヶ月後に行なわれたことから、その間の成長期にある被験児の発達を考えられ、もう 1 つは学習要因が考えられる。これに関連する結果として、自己充足容易事態（B）における要求行動の生起頻度が、自己充足困難事態と比較して、S2, S3, S4 の順で低い値を示しており、その傾向は被験児の知的レベルの順に対応している。したがって、先の要求行動の変化も被験児の発達レベルおよび学習能力に応じた鋭敏さに基づいて生じた結果であると考えられる。

ところで、S1 が自己充足容易事態（B）で他の被験児と異なって高い要求回数を示したのは、椅子を棚の前に移動しないでそのまま椅子に乗って要求する行動が繰り返されたためであった。これは、本児の理解能力が低く、棚から僅か 50 cm の位置に椅子があるにもかかわらず、椅子を移動するという方法を選択できなかったことによると思われる。

2) 要求充足者の親密度の差による要求行動の反応型

次に、要求充足者の親密度の差が精神遅滞児の要求行動の反応型とそのレパトリーに及ぼす影響について検討したい。

実験から得られた結果は、被験者によって異なるが、まとめると次のような傾向が伺える。

すなわち、要求行動の反応型のレパトリーについてみると、いずれの被験児も母親条件と未知の人条件でほぼ同じであった。しかしプロフィールには違いが認められ、特にその傾向は A2 事態で顕著にみられた。また、その差は知的・言語的能力の高い S3・S4 で顕著に認められた。この A2 事態における両条件での傾向差をまとめてみると、S1 では母親条件で「指さし」が、未知の人条件では「クレーン行動」の占める割合が多く、S2 では「指さし」が未知の人条件のみに見られた。さらに S3・S4 では同じ傾向が認められ、未知の人条件では要求行動の反応型は「指さし」のみで、母親条件で主要な反応型であった「要求発語」は観察されなかった。また、S3・S4 では、母親には要求行動以外にも多様な言語行動ややり取りが活発になされたのに対して、未知の人には要求行動以外の言語行動ややり取りは非常に少なかった。

以上のように、要求充足者の親密度の差は、生起する要求行動の反応型に対しても影響を及ぼすと考えられる。その反応傾向は、親密度の低い未知の人に対しては音声系よりは動作系の要求行動を、また同系列内ではより未熟なあるいは未分化な反応型を使用する傾向が伺える。しかしながら、こうした要求充足者の違いによる要求行動の反応型の差が最初の A1 事態より後の A2 事態で顕著に見られ、被験児の知的言語的能力が高い程その傾向が明確となっている。こうしたことから、先に要求行動の生起に関して示唆されたと同様に、その反応型の発現傾向、即ち反応選択においても、要求充足者の要求者に対する親密度という要因のほかに、他の学習要因が関与していると言えるであろう。

3) 要求行動の生起および反応型の選択にかかわる学習要因

以下では、本実験の結果より示唆された、要求充足者の親密度以外の学習要因について考えてみたい。

先行研究の結果を見ると、同じ自己充足困難事態で観察を行った藤原ら(藤原, 1985; 藤原・加藤, 1985)の報告においても、この自己充足困難事態で要求充足が繰り返されることによって要求行動の生起に変容が見られることが示されている。そして、語彙が豊富であるにもかかわらず要求言語行動の使用に乏しい自閉症児における実験観察から、このような要求充足体験を通じて要求充足者が要求行動の生起にかかわる弁別刺激機能を獲得することが指摘されている(藤原, 1985)。こうしたことから考えて、本実験においても、短期間ではあるが、自己充足困難事態である A1 事態から A2 事態に至る過程で繰り返された要求充足体験の差によって、要求充足者である母親および未知の人で、要求行動の生起にかかわる統制機能に差が生じ、その結果、母親と未知の人を弁別して要求行動が生起する傾向が強まったと考えられる。

次に、全般的に A2 事態で特定の反応型への収束傾向と、それが母親条件と未知の人条件とで被験児の言語レベルに応じて要求対象物を特定化する反応型に違いが認められた。これについては、先の藤原・加藤(1985)の報告でも同様の結果が報告されている。すなわち、被験児の現在の言語発達水準に応じた要求行動の反応型の収束がみられること、さらにこの反応選択は要求対象物の特定化に関連して要求充足者の対応が関与することを示唆している。つまり、要求行動の反応選択においては、その反応型の発現が要求充足的対応につながるかどうか重要な決定要因となり、要求対象物を要求充足者に対して的確に特定化出来ない反応型は消去され、的確に特定化されやすい反応型のみが強化され選択されるようになることが指摘されている。

本実験では、母親は子どもの反応を最もよく知っている存在であり、また実験開始当初より変わらず一貫して係わっている。したがって、被験児とは初めてでありしかも 1 回きりしか対面しない未知の人に比べて、母親は回を重ねるごとに子どもの要求行動の発現に達して的確に

対応し易くなり、しかも自己充足困難事態はそれを容易にする事態であった。こうしたことは、被験児にとってみれば、未知の人よりも母親に対しての方が、より要求対象物を特定化するの的確さを要しないですむようになるといえる。こうした理由から、母親に対しては指示動作とともに、言語発達に遅滞を持つ被験児にとって要求対象物を特定化することに難度が高く未だ不安定な発声・発語も出現したのであろう。それに対して、要求対象物を特定化することが母親よりも困難な未知の人には、要求対象物の特定化が容易でしかも的確な指示動作を選択する傾向が強まったものと考えられる。こうした傾向は、本実験で見られたように、知的発達レベルが高く学習能力が高い被験児に当然鋭敏に反映するであろうと考えられる。

以上の考察から本実験の結果は次のことを示唆していると考ええる。すなわち、言語発達に遅滞を示す精神遅滞児の要求行動の生起においては、要求者に対する要求充足者の親密度という要因は、基本的にその生起確率と発現される反応型に影響を及ぼす。しかしそれ以上に、要求行動の生起においては、要求行動に固有の文脈の中で獲得される要求充足者の刺激機能、つまり強化メディエーターとしての機能と要求行動の生起を統制する弁別刺激機能の獲得が重要であり、強く関与していることが示唆される。そして、この要求充足者の刺激機能は、要求者の要求に対する充足的対応を通して獲得され、さらにそこで選択される要求行動の反応型は、要求者が要求対象物を特定化することに対する要求充足者の対応関係によって決定されることが考えられる。

したがって、今後は、重い言語遅滞を示す自閉症児や精神遅滞児を対象に、ここで示唆された要求行動の生起とその反応型の選択にかかわる要求充足者の対応について詳細に検討する必要があるであろう。

注

- 1) “pure mand”とは、純粋な摂取制限によるマンドである。〈例〉(誰もいない)荒野のまっただ中で、ノドがからからな行者が「水」と言った (Winokur, 1976. p. 48)。

引用文献

- 阿部芳久 1989 自閉症児における要求言語行動の形成—日常生活場面における機会利用型指導法の検討— 東北福祉大学紀要, 13, 81-94.
- 藤原義博 1985 自閉症児の要求言語行動の形成に関する研究 特殊教育学研究, 23(3), 47-53.
- 藤原義博・加藤哲文 1985 重度言語遅滞児の要求言語行動における反応選択 発達障害研究, 7(1), 42-51.
- Halle, J.W., Marshall, A.M., and Spradlin, J.E. 1979 Time Delay: A technique to increase language use and facilitate generalization in retarded children. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 12, 431-439.
- Hart, B. and Risley, T.R. 1975 Incidental teaching of language in the preschool. *Journal of*

Applied Behavior Analysis, 8, 411-420.

加藤哲文 1988 無発語自閉症児の要求言語行動の形成—音声言語的反応型の機能化プログラム— 特殊教育学研究, 26(2), 17-28.

Skinner, B.F. 1957 Verbal behavior. Prentice-Hall.

Winokur, S. 1976 A primer of verbal behavior: An operant view. 佐久間徹・久野能弘（監訳）1984 スキナーの言語行動理論入門 ナカニシヤ出版

The effect of mediator's familiarity with mental retarded children on their mands

Yoshihiro FUJIWARA

ABSTRACT

Four language-delayed children with mental retardation were observed on their mands for specific objects and the effectiveness of reinforcement mediator's function on the emission and topographies of their mands were examined.

Two kinds of adults in the different degree of familiarity with a subject were used as the reinforcement mediator : one was his mother, who seemed to be most familiar with him, and another was a stranger of most unfamiliar with him. In the experimental settings of A, child's favorite objects were placed out of reach on a shelf and the reinforcement mediator, his mother or a stranger, stood beside the shelf. In B setting, a chair was placed about 50 cm apart from the shelf and other setting was as same as A setting. In C setting, child's mother and a stranger were used as the reinforcement mediator together in the room and other setting was as same as A setting.

The results indicated that in A and C settings mands were emitted in the mother-condition more than in the stranger-condition and that mediator's familiarity with a subject seemed to be effective on the topographies of his mands. The results, however, suggested that mediator's function was effective on mand's emission and topographies as differential stimulus more than one's familiarity with subject.